

史跡宇治川太閤堤跡・乙方遺跡発掘調査 現地説明会資料

調査場所	宇治市宇治乙方 18-1・101-1	名称	史跡宇治川太閤堤跡・乙方遺跡
調査担当	宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課 TEL (0774) 21-1602		
発掘理由	[26-1 調査区] 史跡整備にあたり、河岸段丘崖を確認するため(国庫補助) [26-2 調査区] 史跡整備にあたり、調査区の土地利用を確認するため(国庫補助)		
調査期間	[26-1 調査区] 平成 26 年 6 月 25 日～平成 26 年 9 月 30 日(予定) [26-2 調査区] 平成 26 年 8 月 4 日～平成 26 年 9 月 30 日(予定)		
調査面積	[26-1 調査区] 150 ㎡ [26-2 調査区] 400 ㎡	掘削深度	[26-1 調査区]1.2m～3.4m [26-2 調査区]0.9m～1.6m
検出遺構	置石(粘板岩)、溝状遺構、素掘り溝、ピット、粘土取り穴	出土遺物	瓦、陶磁器、土師皿、瓦質製品、煉瓦

1. はじめに

太閤堤は、天下統一を果たした豊臣秀吉が、淀川・宇治川に造らせた堤防の総称です。宇治川太閤堤跡は、太閤堤の護岸施設の一部です。平成 19 年に宇治川右岸で発見され、その後の調査で全長 400m 以上にわたって護岸施設が良好な状態で残っていることが確認されました。平成 21 年には、当時の技術の粋を集めた大規模治水工事の様子を今に伝えるものとして、国の史跡に指定されています。宇治市ではこの貴重な文化財を顕彰し未来に伝えるため、(仮称)宇治川太閤堤跡歴史公園の整備を進めることとしています。

この史跡宇治川太閤堤跡とその周辺は、宇治川に面した好所のため各時代の遺跡が重複しています。これらの遺跡は乙方遺跡として、周知されてきました。古くは旧石器時代、弥生時代、古墳時代などの遺物や集落跡や古墳など、新しくは江戸時代の瓦窯跡そして明治期の煉瓦窯跡が確認されています。

今回の発掘調査は、この 2 つの遺跡について調査しました。



<発掘位置図>

2. 調査概要

26-1 調査区

史跡地南半部では河岸段丘崖のラインが太閤堤の護岸のラインとなり、そのような護岸施設の状況を確認するために、発掘調査を実施しました。

調査区東半部の川岸にあたる部分では、近現代の耕作溝と近代の粘土取り穴がみつかりました。粘土取り穴には、^{さんがわら} 棧瓦が廃棄されていました。

調査区の中央付近では、太閤堤がつくられた当時の古い宇治川の河岸段丘崖がみつかりました。最下部(段丘崖の裾)では粘板岩が二点みつかりました。太閤堤に伴う護岸施設の一部と考えられます。調査区に直交する擁壁の建設によって上半部が削られていましたが、下部の段丘面の角度より復元し、平成 23 年度の発掘調査で確認した段丘肩のラインの延長線上に位置することを確認しました。

26-2 調査区

調査地は、太閤堤がつくられた当時は宇治川の河床にあたる場所で、その後の土地利用を確認するため発掘調査を実施しました。

調査区では河川堆積層の上層で上下 2 層からなる耕作土と溝を確認しました。上層耕作土からは、陶磁器やレンガの破片が出土しました。この場所では、近年まで茶畑が営まれていたことから、上層の耕作層は茶畑に伴うものと考えられます。下層の耕作層の時期が、どこまで遡るかは確認できていませんが、今回の調査でこの場所が宇治川の運ぶ砂に埋もれて陸地化した後に、茶畑が営まれたことがわかりました。

3. 出土遺物

粘土取り穴からは棧瓦、陶磁器、瓦質製品、煉瓦などが出土しました。護岸施設の一部と考えられる置石の上から河岸段丘崖にかけて、大量の棧瓦が捨てられていました。棧瓦には宇治市五ヶ庄にある萬福寺で使われた「萬福禪寺(まんぷくぜんじ)」・「寶藏禪院(ほうぞうぜんいん)」の銘がある瓦もみつかりました。おおよそ遺物の年代は江戸時代後半のものが多くでてきました。

またわずかですが、古墳時代後期の埴輪片や二重口縁壺の破片や古代の瓦が出土しました。

4. まとめ

今回の調査では、26-1 調査区においてかつての宇治川の河岸段丘と段丘崖の裾に粘板岩を据えた太閤堤の護岸施設の一部を確認することができました。粘板岩の上に捨てられた瓦から「萬福禪寺」の文字の確認できる軒丸瓦が出土したことより、萬福寺創建時(1661年)以降の堆積であると考えられます。また、26-2 調査区では宇治川が運ぶ砂によって砂州が形成されたのちに茶畑が営まれたことがわかりました。

宇治市では、(仮称)宇治川太閤堤跡歴史公園をどのように整備していくかを、発掘調査成果を踏まえたうえで、検討してゆきたいと思えます。